プロフィール

橋本晋哉 (はしもと・しんや)

低音金管楽器奏者。1971 年生まれ。フランス国立パリ高等音楽院 (CNSM) テューバ科、同音楽院第 3 課程器楽科(テューバ科)、同音楽院第 3 課程室内楽科を修了。在仏中アンサンブル・イクトゥス、アンサンブル・アンテルコンタンポランなどの現代音楽アンサンブル、フランス国立管などのエキストラのほか、ジャック・ルボチエのシアター・ミュージック、フェスティバル・アゴラ、レゾナンス 2003(IRCAM)への出演など主に現代音楽を中心として活動。2001 年より「秋吉台の夏」現代音楽セミナーに講師として参加。2005 年帰国後、サントリー音楽財団サマーフェスティバル 2008、コンポージアム 2009(ラッヘンマン「ハルモニカ」日本初演)などの音楽祭、東京オペラシティリサイタルシリーズ「 $B \to C$ 」、NHK-FM「名曲リサイタル」にソリストとして出演。他方古楽器のセルパンやクラシカル・バス・トロンボーンを用いて古楽の分野でも活動。2002年アヴァン・センヌ(フランス)において審査員全員一致で第 1 位受賞。同年第 5 回現代音楽演奏コンクール(日本現代音楽協会主催)第 2 位。2003年ガウデアムス国際現代音楽演奏コンクール(オランダ)特別賞(即興)受賞。



http://www.shinyahashimoto.net

藤田朗子(ふじた・あきこ)

北海道札幌市出身。東京芸術大学音楽学部器楽科(ピアノ専攻)、パリ国立高等音楽院伴 奏科、同音楽院第三課程室内楽科(テューバ・ピアノ及びセルパン・クラヴサンデュオ)を 卒業。

ピアノを中山ヒサ子、播本三恵子、倉沢仁子、辛島輝治、伴奏法を山洞智、Jean KOERNER、室内楽を Gerard BUQUET、Jens MacMANAMA の各氏に師事。

第77回日演連新人演奏会にて札幌交響楽団と共演。ソロの他、二一ス国際夏期講習会、パリオペラ座、フランスユースオーケストラなどで公式伴奏者をつとめ、パリ音楽院オーケストラなどでも鍵盤楽器奏者として活躍する他、スコアリーディングを伴う指揮科の伴奏など特殊分野でも活躍中。 室内楽、新曲初演などで国内外の演奏家と共演。

2003年より山口県秋吉台国際芸術村にて行われている現代音楽セミナー「秋吉台の夏」に演奏 家として参加。2004年現代音楽フェスティバル「A Tempo」(フランス)に参加。 http://accompagne.blogspot.com/



山本裕之(やまもと・ひろゆき)

1967 年山形市生まれ、主に神奈川県で育つ。1992 年東京芸術大学大学院作曲専攻修了。在学中、作曲を近藤譲、松下功の両氏に師事。これまでに第58回日本音楽コンクール第3位(1989)、ガウデアムス国際音楽週間'94(オランダ/1994)、現音作曲新人賞(1996)、BMW musica viva 作曲賞(ドイツ/1998)、ISCM 世界音楽の日々(ルクセンブルク/2000、横浜/2001)、武満徹作曲賞第1位(2002)、第13回芥川作曲賞(2003)など、様々なコンクールや音楽祭に入賞、入選している。作品は Ensemble Contemporain de Montreal(モントリオール)、Nieuw Ensemble(アムステルダム)、バイエルン放送交響楽団(ミュンヘン)、ルクセンブルク管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団など、各地の演奏団体により演奏され、またラジオで放送されている。1990年より作曲家集団《TEMPUS NOVUM》に参加、2002年よりピアニスト中村和枝氏とのコラボレーション《claviarea》を開始するなど、様々な活動を展開している。2002年第51回神奈川文化賞未来賞受賞。現在、愛知県立芸術大学准教授。http://japanesecomposers.info/ja/





- THE TUBA IN MY LIFE -

2010年3月30日(火) 19:00 @ 渋谷・公園通りクラシックス

http://shinvahashimoto.net/blog







今日のチューバをあぶり出す――山本裕之

歴史が新しいゆえにオリジナル曲が少なく、既成の古典音楽もどん欲にレパートリーに組み込む楽器は珍しくなく、チューバも例に漏れない。しかし古典作品を演奏する場合、多くはただの移植的な編曲(アレンジメント)で済まされている。もちろん各楽器の特質に合わせた優れた編曲は数多く存在するが、それをもう一歩でも二歩でも推し進めて、その楽器でしかありえない「まるでオリジナルの作品であるかのような固有性」を持たせたものにするためには、さらに踏み込んだ方法が必要だろう。

今夜はそのような考えに基づき、テーマを "Transform" (状態変化) と設定した。チューバで演奏されることが考慮されていない (むしろチューバなど存在しなかった時代の) 古典作品をフィルターにし、この楽器の裏と表の特質をむき出し、あぶり出したい。キーワードは以下の4+1つ

■テキストからの離脱:歌をチューバへ丸め込み

■オブリガートの剥離:主役はチューバ

■舞曲の物質化:チューバで四変化

■ポリフォニーの解体:楽譜もチューバもバラしてリメイク

&

■チューバの現在: Transform を抜け出して

橋本さんから今回のコラボレーションのお話しをいただいたときには二つ返事でお引き受けしたが、しばらくはどのような内容にすればよいのかアイデアが出ずに悩んだ。その後いろいろご相談し、橋本さんから提供していただいたチューバの様々な可能性と、私自身が日頃持っているチューバに対する考えがミックスし、今日のプログラムを生み出した。結果としてこのような巷のコンサートにはあまり見られないプログラムを実現出来るのもお二人ならではで、私はほとんど企画を乗っ取るような勢いで参加させていただいた。私自身コンサートの一夜を一人で丸々プロデュースさせていただく機会はそうあるわけではないので、その意味でも充実した貴重な経験となっている。なによりもこのお二人と一緒に一夜のライヴを組み立てられたことは、楽器を演奏しない私にとって作曲家冥利に尽きるといえよう。

[Program]

L.v. ベートーヴェン | ソナタ へ長調 Op.17 (1800)

F. シューベルト=山本裕之 | シューベルト超有名歌曲集 (2010)

G. マショー=山本裕之 | マショー三態 (2010)

J.S. バッハ | パルティータ イ短調 BWV1013 (1720 頃)

田中吉史 | Aura di Bruno (2008)

山本裕之 | 輪郭主義 | (2010・初演)

(演奏順不同)

プログラムノート(演奏順不同)

オブリガートの剥離◆ L.v. ベートーヴェン | ソナタ へ長調 Op.17 (1800)

モーツァルトより以前、そしてベートーヴェンの一部の曲では、「○○とピアノのためのソナタ」といえばピアノがメインとなり○○はオブリガート楽器だった。オブリガートにはオブリガートとしての書法があって、通常それだけを抜き出して演奏してもあまり魅力的ではない。

しかしチューバにとって、オブリガートパートはこの楽器の質感が強調され得る別の魅力を内包している。そこで「○○とピアノのためのソナタ」からオブリガートパートを引き剥がして聴いてみようというのが『オブリガートの剥離』の趣旨である。方法は非常に簡単。

テキストからの離脱◆ F. シューベルト=山本裕之 | シューベルト超有名歌曲集(2010)

歌曲を器楽用に編曲しようとすると、ふつうはその美しい旋律をどう活かそうかとか、テキストとの関わりをどうしようかとか、少なくともおかしく聞こえないように辻褄を合わせようという処理になると思うが、そもそも優れた歌曲とはテキストに依存しなくても成立するもの、純粋な器楽曲として、チューバ専用の音楽として新たにシューベルトの三つの歌曲を生まれ変わらせる。

1. 糸を紡ぐグレートヒェン 2. 菩提樹 3. 野薔薇

ポリフォニーの解体◆ G. マショー=山本裕之 | マショー三態 (2010)

ギョーム・ド・マショーの音楽は 14 世紀のアルス・ノヴァにおけるひとつの到達点といえる。ハーモニーの概念がない時代の絡み合ったパートはしかし、人間の耳には必ずしもそれぞれの線が分離して聞こえやすいとは限らない。『ポリフォニーの解体』では、テューバ(ダブルベル)とピアノで各パートを裁断し一旦マショーのポリフォニーを分解し、元の線にこだわらずに再構築した。もちろん原曲のポリフォニーは復元されるのだが、まるで様々な色や柄の布が切り離されて、隣同士と新しい脈絡を形作るパッチワークのように、それぞれのパートは楽器や音域に関わらず自由に飛び散ることになる。使用楽曲はつぎの通り。

1. ロンドー《薔薇よ、百合よ、春よ》 2. バラード《婦人よ、見ないで》 3. ダヴィデのホケトゥス

舞曲の物質化◆ J.S. バッハ | パルティータ イ短調 BWV1013 (1720 頃)

古典組曲はいうまでもなく当時の舞曲、すなわちダンスミュージックを様式化したもので、当然のことながら曲のキャラクターは意識的に区別化されている。『舞曲の物質化』は、バッハの無伴奏フルート・パルティータを楽譜そのままの形で演奏する。しかしここでは舞曲にかませる「物質」によってチューバの音響ともども新たな区別化を試みる。

J.S. バッハ:無伴奏フルート・パルティータ イ短調 BWV.1013

- 1. アルマンド(ゴム質吸音材) 2. クーラント(コイル)
- 3. サラバンド(皮と鈴) 4. イギリス式ブーレ(アルミ)

チューバの現在

チューバに限らずどの楽器でもそうだが、演奏家は古い曲だけではなく同時代の新しい音楽も手がける。西洋音楽の歴史は新曲の誕生と淘汰だが、生き残った作品は古典となって Transform の対象になり得る。マショーもバッハもシューベルトもベートーヴェンも、自分の作品が見知らぬ楽器によって演奏し直されるとは思っていなかったのと同様に、どのような新しい音楽も将来どのように状態変化(Transform)させられるのかは分からない。Transform がリコンポジション(再作曲)によって「新しいオリジナル」を作ることなのだとすれば、元の作品は新しい作品のための素材(ネタ)の次元に置かれることを意味する。まだ素材化されていない状態を「ピュアなオリジナル」というのだとしたら、新しい音楽がそうなのである。ではリコンポジションによって誕生した「新しいオリジナル」は「ピュアなオリジナル」たり得るのか(ああややこしい)?歴史は螺旋のように循環する。

ともかく新しい楽器(や編成)であればあるほど、このような状況は起こりやすくなるはずだ。

◆田中吉史 | Aura di Bruno (2008)

田中吉史の《Aura di Bruno, oppure un'intervista interpretata da tuba e pianoforte (ブルーノのアウラ、あるいはチューパとピアノの通訳によるインタビュー)》という長いタイトルを持つ作品は、ブルーノ・マデルナ (1920-73) のインタビュー録音を素材に、作曲者の興味の対象である「話し言葉を器楽に移植すること」というコンセプトで書かれている。上に書いた文意とは異なるがこれもまた一種の Transform である。2008 年橋本晋哉によって委嘱、同年「秋吉台の夏」で初演されている。

◆山本裕之 | 輪郭主義 I (2010·初演)

山本裕之の《輪郭主義 I》は今夜のために書き下ろされた。通常音律のピアノと徹底的な4分音を駆使したチューバはほとんどピッチ・ユニゾンで出会う機会がないが、それでいて概ね明確な線をなぞり続ける。そこに立ち現れるのは歪んだ輪郭であり、常に曖昧な線の提示である。橋本晋哉によって委嘱、2月末に完成。